

2014年8月22日

50～79歳の男女600名に聞いた 『介護されることについての意識』

第一生命保険株式会社（社長 渡邊 光一郎）のシンクタンク、株式会社第一生命経済研究所（社長 矢島 良司）では、全国の50～79歳の男女600名に、標記についてのアンケート調査を実施し、この程その調査結果がまとまりましたのでご報告いたします。

ホームページ（URL：http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/ldn_index.html）にも掲載しましたので、併せてご覧ください。

《調査結果のポイント》

介護を受けたい場所とその理由（P. 2-3）

- 男性では「自宅」派が過半数だが、女性は「介護施設」派が多い。
- 自宅派は「住み慣れた家で暮らしたいから」、施設派は「家族に負担をかけたくないから」が理由。

介護をしてもらいたい相手（P. 4）

- 夫は「妻」に、妻は「施設の職員」に

自宅で最期を過ごしたいか（P. 5）

- 6割が「自宅で過ごしたいが、実際には難しい」と感じている。
- 男女ともに、最期を自宅で過ごしたいという思いは強いものの、女性では、実際には実現できないと思っている人が多い。

孤立死する可能性（P. 6）

- 「あるかもしれない」と感じている人は36.9%。
- 女性の方が孤立死する可能性を感じている人が多い。

☆本冊子は、当研究所から季刊発行している『ライフデザインレポート』Summer 2014.7をもとに作成したものです。当該レポートは、下記のホームページにて全文公開しております。

<お問い合わせ先>

(株)第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当（津田・新井）
TEL. 03-5221-4771
FAX. 03-3212-4470

【URL】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>



《調査実施の背景》

家族のかたち、死や老いをめぐる社会の環境は大きく変化しているなか、自身や家族の死や老いについて、人々はどのように考えているのかを明らかにするため、当研究所では、全国の50～79歳の男女600名にアンケート調査を行いました。

＜調査対象者＞ 50歳以上79歳の全国の男女600名（第一生命経済研究所生活調査モニターより抽出）

＜調査時期＞ 2013年8月13日～9月1日

＜調査方法＞ 郵送調査法

＜有効回収数＞ 545名（有効回収率90.8%）

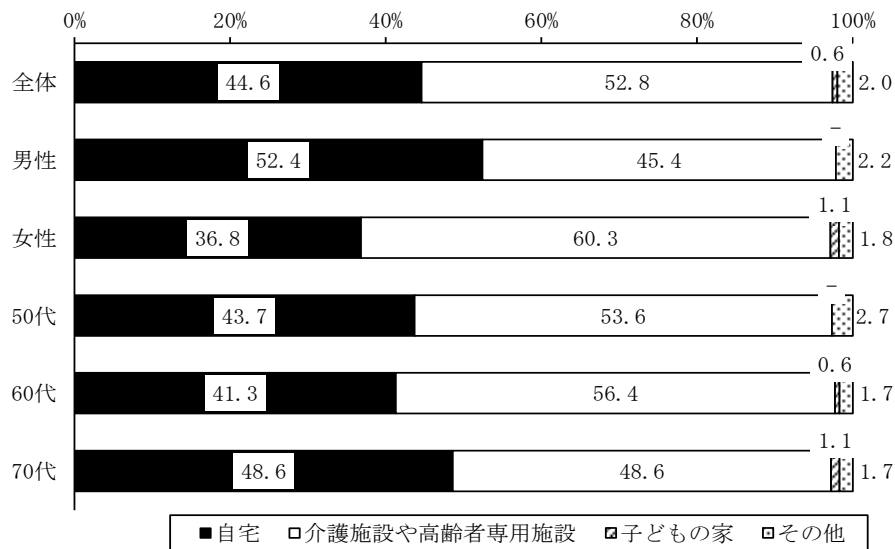
（単位：人）

	50代	60代	70代	性別合計
男性	86 (31.6%)	92 (33.8%)	94 (34.6%)	272 (100.0%)
女性	97 (35.5%)	87 (31.9%)	89 (32.6%)	273 (100.0%)
年齢層合計	183 (33.6%)	179 (32.8%)	183 (33.6%)	545 (100.0%)

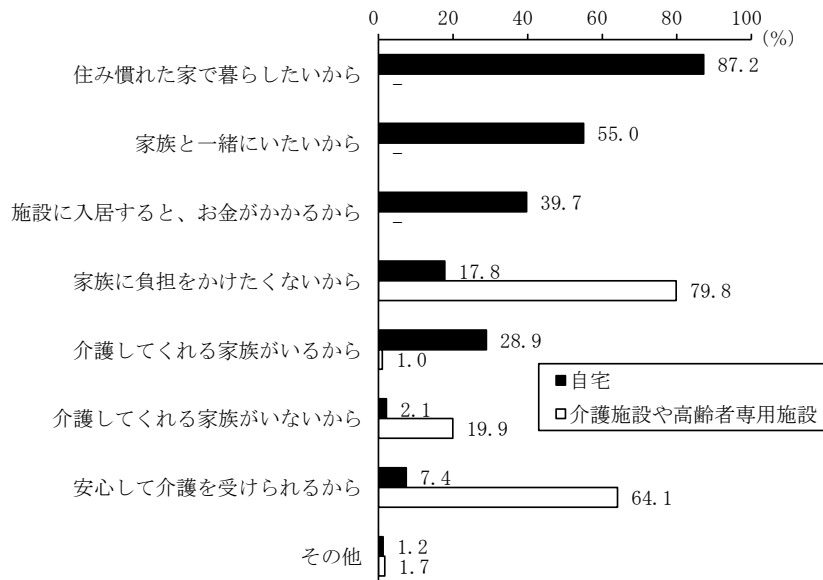
介護を受けたい場所とその理由

男性では「自宅」派が過半数だが、女性は「介護施設」派。
 自宅派は、「住み慣れた家で暮らしたいから」、施設派は「家族に負担を
 かけたくないから」

図表1 将来、介護を受けたい場所



図表2 自宅や介護施設で介護を受けたい理由（希望する場所別）＜複数回答＞



日常生活を送る上で介護が必要になったら、「介護施設や高齢者専用施設」で受けたい人が過半数を占めました。性別では、男性では「自宅」と回答した人が半数を超え、女性の36.8%を15ポイント以上上回っています。

また自宅派は「住み慣れた家で暮らしたいから」(87.2%)、施設派は「家族に負担をかけたくないから」(79.8%)、「安心して介護を受けられるから」(64.1%)という回答が多く挙げられました。このことから、自宅と施設のどちらで介護されたいかという思いの裏には、まったく異なる意識があることが分かります。

介護をしてもらいたい相手

夫は「妻」に、妻は「施設の職員」に。

図表3 誰に介護をしてもらいたいか

(単位:%)

	全体	配偶者あり		配偶者なし	
		男性	女性	男性	女性
n (人)	543	214	155	57	117
配偶者	37.8	71.5	32.2	-	-
息子	2.9	2.8	0.6	5.3	5.1
娘	10.3	1.9	19.4	1.8	17.9
息子の配偶者や子ども	0.2	-	-	-	0.9
娘の配偶者や子ども	0.2	0.5	-	-	-
上記以外の親戚	1.1	-	-	5.3	2.6
施設の職員	36.6	19.6	39.4	52.6	56.4
訪問介護のスタッフ	10.9	3.7	8.4	35.0	17.1

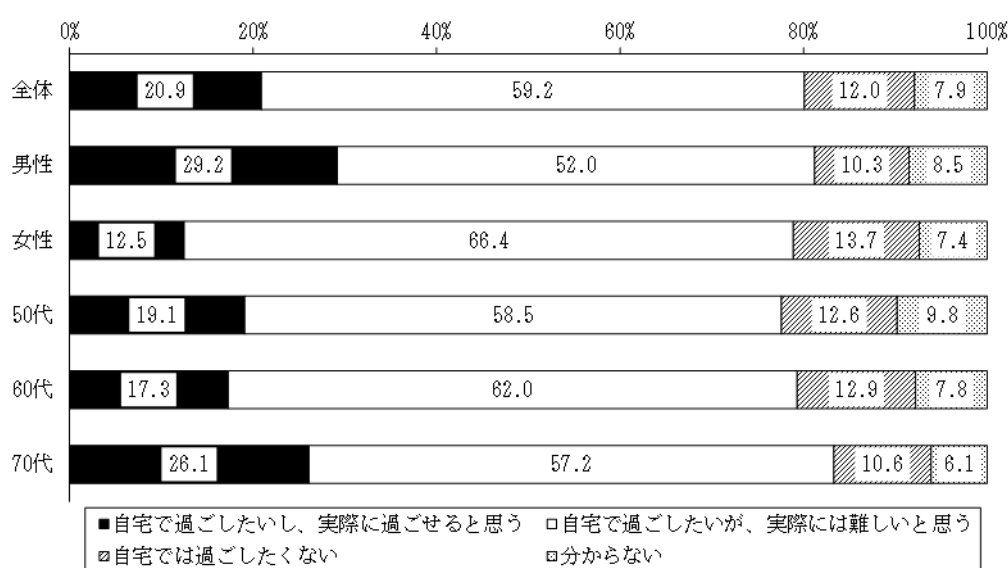
寝たきりや体が不自由になった場合、主として誰に介護をしてもらいたいかを択一でたずねると、配偶者がいる男性は「配偶者」と回答した人が71.5%もいましたが、女性では32.2%にとどまり、「施設の職員」と回答した人(39.4%)を下回りました。

また配偶者がいない人では、男女ともに「施設の職員」を挙げた人が過半数を占めました。配偶者の有無に関わらず、娘に介護してもらいたいと考えている人は女性に多いようです。男性は、妻がいれば妻に、妻がない場合には「施設の職員」か、「訪問介護のスタッフ」に介護してもらいたいという構図が強くみられますが、女性の場合は、夫よりも施設の職員に介護してもらいたいこと、また娘の存在が大きいことが読み取れます。

自宅で最期を過ごしたいか

6割が「自宅で過ごしたいが、実際には難しい」と感じている。
男女ともに、最期を自宅で過ごしたいという思いは強いものの、
女性では、実際には実現できないと思っている人が多い。

図表4 死期が近い場合、自宅で過ごしたいか(全体、性別、年齢層別)



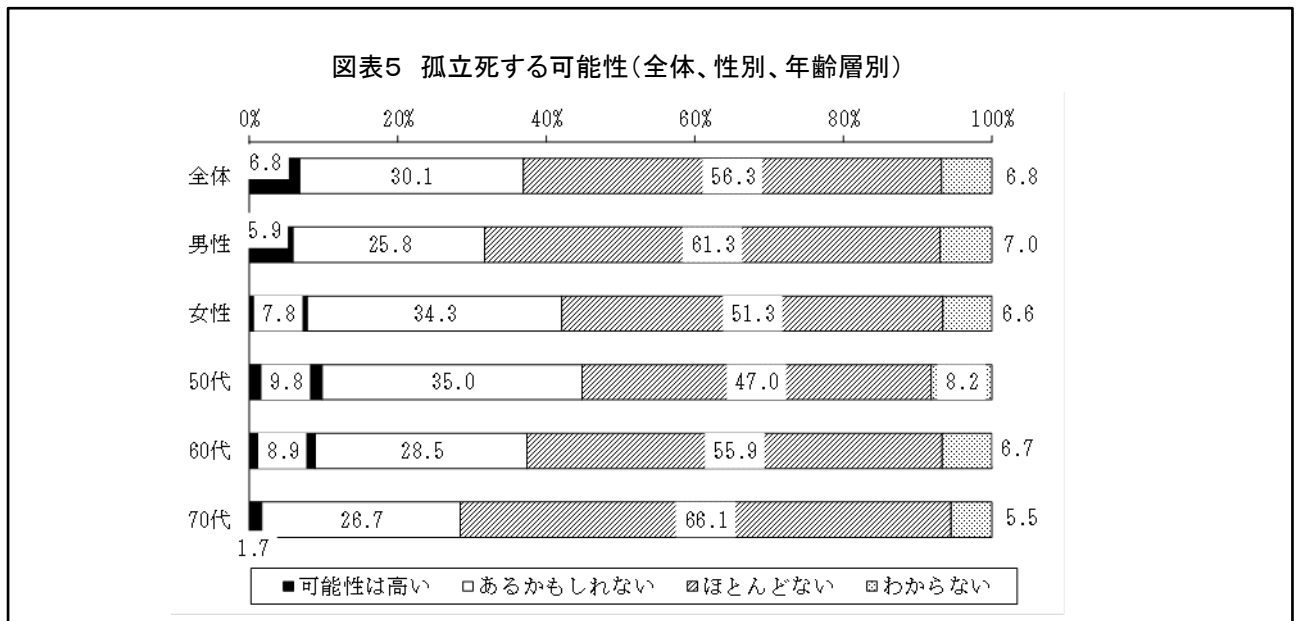
治る見込みがなく、余命が限られた場合、「自宅で過ごしたいが、実際には難しいと思う」と回答した人が59.2%と6割近くおり、「自宅で過ごしたいし、実際に過ごせると思う」とした人(20.9%)を合わせると、80.1%は自宅で過ごしたいと考えていました。

性別にみると、男性では「自宅で過ごしたいし、実際に過ごせると思う」と回答した人が29.2%と、女性の12.5%を大きく上回っています。一方、「自宅で過ごしたいが、実際には難しいと思う」女性は66.4%もいます。男女ともに、最期を自宅で過ごしたいという思いは強いものの、女性では、実際には実現できないと思っている人が多いことが分かります。

年齢層別では、「自宅で過ごしたいし、実際に過ごせると思う」と回答した人は70代では26.1%と多く、「自宅で過ごしたいが、実際には難しいと思う」人(57.2%)を合わせると、83.3%が自宅で過ごしたいと考えています。

孤立死する可能性

「あるかもしれない」36.9%。女性の方が孤立死の可能性を感じている。



自分の遺体は何日も誰にも発見されない可能性の有無をたずねたところ、「可能性は高い」と回答した人は全体で6.8%にとどまりましたが、「あるかもしれない」(30.1%)を合わせると36.9%が、孤立死の可能性を認識しています。

性別にみると、孤立死の可能性が「ほとんどない」とした人は、男性では61.3%だったのに対し、女性では51.3%と半数程度しかおらず、男性より女性の方が、自身の孤立死の可能性を自覚している人が多いようです。

年齢層別にみると、孤立死の可能性が「ほとんどない」とした人は70代では66.1%と多いですが、50代では47.0%と半数に満たない状況です。50代では「可能性が高い」「あるかもしれない」と回答した人が合わせて44.8%となり、孤立死の可能性の自覚の有無は二分されました。

《研究員のコメント》

今回調査では、多くの男性は、万が一の場合は妻に介護してもらうことを期待しており、余命が限られた場合でも最期まで自宅で過ごせるという確信を持つ人が少なくありませんでした。「自分は妻より先に介護が必要な状態になり、妻より先に亡くなる」という前提に立ち、自分が自立できなくなった後の処遇を妻任せにするという男性が少ないことが背景にあるようです。しかし実際には、厚生労働省「国民生活基礎調査」によれば、介護者が妻である割合は思ったほど多くありません。しかも男性の長寿化に伴って、今後は、妻が先に介護が必要な状態になる、あるいは妻に先だたれ、男性が介護者、または遺族となる可能性が高まっています。

調査から、「頼れるのは配偶者」という傾向が明らかになりましたが、頼れる人の存在は、高齢者の安心を支えるうえで重要であることは想像に難くありません。その意味で、配偶者と死別した後、万が一のときに頼りになると思える人をどう確保できるかは、生活の再構築の上で重要な課題となるといえます。しかし配偶者の介護や死に直面する年齢が高齢化していることから、いざとなってからでは、新しい環境に適応するのは難しくなっています。信頼できる人を家族以外に確保しておくことも、ライフスタイルが多様化する高齢社会において、大切なリスクマネジメントといえるのではないのでしょうか。

(研究開発室 主席研究員 小谷みどり)